

不登校生徒の今を伝える！既存の ICT 機器を使った「通信」に出来る事

毎日の発信から見てきたこと

福津市教育支援センター「ひだまり」 指導員 升野 潤, 今津 理恵, 高橋 輝彦, 藤原 富男

キーワード：不登校, iPhone, 通信, 教育支援センター, 適応指導教室

実践の概要

既存の ICT 機器と iPhone を使った「通信」から見てきたこと。指導員の負担軽減。保護者が見たい姿や即時性の高い発信。少人数でも発信できるシステム。子供達の本物の姿を撮影するための工夫。地域への広がり。保護者の変化。子供の変化。

1. 目的・目標

(1) 月 1 の紙から毎日のデジタルへ

活動を伝える方法として紙媒体の通信がある。本施設においても 2019 年度まで紙の通信を月 1 回程、出してきた。しかし紙面には掲載スペースに限りがある。即時性も欠けており、今何をしているかを伝えることができていなかった。そこで新型コロナによる休校明けからメールによる通信を開始し、ほぼ毎日通信を行っている。

(2) デジタル化のメリット

物理的な時間がかからなくなった。具体的には印刷、配布、子供達が保護者に渡すなどの行為が全てカットされ直接届けることができる。次に即時性。その日の活動をその日の帰りの会終了後には配信するので子供達の今を伝えられる。内容には指導員の考えなどは書かず、活動内容と写真を中心に掲載した(写真 1)。これにより指導員の負担は軽減された。このことで持続可能な取り組みになった。



写真 1 ある 1 日の通信

2. 実践内容

2.1 ICT 機器が充実していない「ひだまり」

予算も少なく特別な機器もない本施設にとつてできることは PC を使うことと iPhone で写真を撮影する程度である。しかし、これだけでも工夫次第で新しいことに取り組める。年度初めからとにかく写真撮影の回数を増やしていった。当初は写そうとすると逃げたり顔を隠したりする子供が多く、なかなか表情まで収めることはできなかった。学校に行っていない子供達なので致し方ないと感じていたが、毎日色々な場面で手軽に撮影を繰り返しているうちに、写されている意識が子供達からなくなっていった。写真撮影を特別なものではなく、日常の当たり前前にできたことが大きい。これにより徐々に子供達の

自然な表情や動きなどの写真が増えてきた。メールに添付する際には目の部分に修正を加えている。デジタルデータが送付されるので、これを勝手に SNS 等に上げられるのを防ぐためである。それでも地域の方から「目の部分を隠していても笑顔でいることがすぐにわかる」と評価していただいた。保護者からは「今まで見たことのない子供の表情」と報告を受けた。手軽な撮影が日常に溶け込むことで生み出されたものである。

2.2 少人数でできる体制

指導員は 2 名のシフトで回している。故に毎日 ICT に長けたスタッフがいるわけではない。そんな中、SNS をうまく使い文章や写真データを送ることで、ほぼ毎日の通信を続けることができていた。これも特別なソフトや機器は全く使用していない。離れた場所からでも通信を出すことができる。また、通信は休日の指導員にも配信するので休んでいた日の様子が分かり、勤務した時、同じ話題で子供達と接することができるという二次的な効果も出てきた。また大きなイベントの前日などには紙のプリントで子供達に持参物や集合場所、時間などを知らせるのだが同時にメールでの通信を保護者に行った。これは保護者の安心感を生むと同時に、保護者に連絡が届いていないのではないかという指導員側の不安をも払拭することができた。

2.3 積み重ねたもの

昨年度から今年度 11 月までに撮影された写真の枚数は 10,000 枚を超える。送信回数は昨年度が 150 回程、今年度が 100 回程(11 月中旬時点)である。昨年度終了時には通信を一冊にまとめ(PDF)、教育委員会、各学校へ「ひだまり」の取り組みの全体像を届けることができた(写真 2)。年間の活動内容を知っていただいたことが

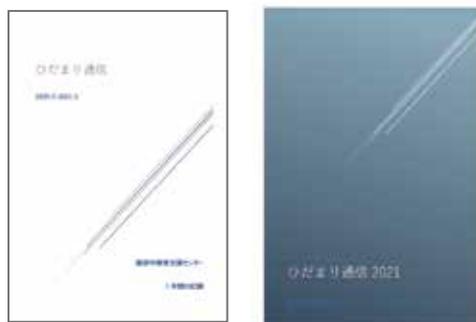


写真 2 2 年分の通信の PDF 化

好評だった。「ひだまり」修了式においては大量の写真から厳選し曲に合わせて 1 年を振り返ることで子供達は自

分自身を振り返り、保護者や地域の方々は子供達の成長を感じることができた。

3. 成果

これまで家に帰っても「ひだまり」の活動内容を話すことがなかった子供達が保護者と活動のことで会話するようになった。保護者の方からもその日の活動がわかっ



写真3 後で海へ

ているので話しかけやすいと連絡を受けた。子供達は自分達の写真は見ていないが、保護者が見ているので楽しかった様子を細かく話し始めたそうである。ひだまりでも家庭でも暗い表情だった子供達が、明るい表情になったこと、保護者との関係がよくなり、保護者にも笑顔が出てきたのはとても良い成果である。学校に戻ることが全てではないと考えているが、2020年度の復帰率は100%であった。

指導員は写真を撮影する習慣がなかったが毎日の繰り返しで常に記録を残す癖がついた(写真3、4)。デジカメでは面倒なこともiPhoneであればポケットから取り出してすぐに撮影ができる。学校よりもiPhoneを使いやすい環境である。また、写真を指導員間で共有すると同時にハードディスクへ保存することで子供達の成長を映像で振り返ることができるようになった。毎日、通信を出すことが子供達の記録となり、成長の過程で悩んだ時など過去を振り返りながら指導に役立てることができた。

保護者の中にはこの通信が始まるまで「ひだまり」に対しての不信感からか何度も来室しては子供の様子を長時間聞く姿があった。しかし、これが全くなかったのである。毎日の通信で「ひだまり」が開かれていたからである。その証拠に大きなイベントの際には必ず足を運び、カメラを構えておられた。当初見られた攻撃的な表情が消え、温和に話しかけてくださるようになったのはとても印象的だった。

地域の方々の関わりは一人増え、二人増えする中で発信数を増やしていった。今まで部分的にしか見えていなかった活動の全体が見えることで大変良い評価をいただいた。また、その少しの方々が口コミで「ひだまり」の活動を発信してくれることで新たな協力を得られた。地域の方々に育ててもらおう環境が徐々にではあるが整いつつある。また、地域の方がイベントの際、一眼レフカメ

ラで写真撮影や動画撮影をしてくれた。そのデータを「ひだまり」に提供していただくなど明らかに通信を見てから協力してくださる姿があった。

自分を表現できない子供達が多い中、発信を繰り返すことで多くの方に関わっていただき彼ら彼女らを褒めてくれた。小さな成功体験を日々積み重ねることが自信となり「ひだまり」内ではまわりの目を気にせず自分を出せる姿勢が出てきた。全体がこの雰囲気になってから、新しく入室する子供達はこれが当たり前だと思い、入室してすぐに自分を出せる子が増えてきている。たかが通信だが、地道に発信することで多くのプラスを生み出すことができたと感じている。

4. 今後に向けて

これまでの教育現場からの発信は紙が主であったが資源の面、働き方、伝達スピードなどから考えてもデジタル化は進めるべきだと考えている。今回の通信で分かったことは、これからの時代は「発信」が重要であるということだ。発信をすることで少しずつ輪が広がっていった。様々な良い取り組みをしても発信しないことには伝わらない。しかし、誰にでも発信すればいいというものでもない。世界に開かれたネットワークではなく、今回の通信のように、確実に信頼できる人たちだけの閉じた世界に限定した方が良い。インターネットの世界は扱い方を間違えると大変なことになる。しかし、それを恐れてばかりいては何もできない。これからの時代、しっかりとネット知識、リテラシーやモラルを身につけて発信していくことが大切である。未来を生き抜く子供達を育成する立場の大人がここから逃げるのではなく、しっかりと身につけて子供達に範を示して発信していくべきではないだろうか。むやみにSNSは怖いからやらなようにと指導していても何も変わらない。世界は変わっているのだから。指導する立場の人間が変わっていかねばならない。

通信に限らず今後「ひだまり」にもICT機器やWi-Fi環境などが導入されてくるであろう。その時、機器を使って



写真4 干し柿作成

できることにチャレンジすることが大事である。失敗を恐れて動けないでいる大人の姿を見せるのではなく、常に先へ進んでいく姿を見せることが不登校の子供達に与える影響は大きいと思う。常に前進を続ける「ひだまり」の中で、ICT機器を道具としてうまく活用し、子供達の成長に繋げていきたい。